
若鷺の歌

橘川尚文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若鷲の歌

【Nコード】

N8291C

【作者名】

橘川尚文

【あらすじ】

昭和二十年。美しい死の華が咲き乱れた大戦争の焼け跡に、残された人々の生存を賭けた戦いがあった。

新宿西口の焼跡に広がる闇市では、並木路子の「リンゴの唄」がレコードで流され、そうかと思えば別の角では、片足のない傷痍軍人が、復員服姿で筵の上に座り、ハーモニカで軍歌を吹いていた。

若い血潮の予科練の

七つボタンは桜に錨

今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にや

でかい希望の雲が湧く……。

曲に合わせて唱歌する者もなく、大きな荷を背にした人々は、黒ずんだ疲れきった表情で、その前を通り過ぎていく。

そのときB-29の巨大な影が、上空をのっそりフライパスしていった。レシプロエンジンの爆音が周囲に轟くと、みな一旦立ち竦むようにその場に足を止め、傷痍軍人もハーモニカを止めて、息を殺し、飛び去るのを待った。

B-29が行ってしまい、市に再び日差しが照りつけると、人々はまたとぼとぼ歩き出す。か細いハーモニカの音色も再開した。

「払えない、つてのはどういうことなんだ？ 山岡さん」

市の片隅に、半長靴を履いた飛行服の男が居た。茶色い飛行服は色褪せ、綻びも目立つ。痩せているが、鍛えられたしなやかな身体をしていた。

「勘弁して下さい榎崎さん。来月はきつとお支払いしますから、今月は待つて頂けませんか」

「来月？」

飛行服の男、元海軍一等飛行兵曹・榎崎渉は、腰から銀色に光る何かを引き抜き、それを音高く卓に叩き付けた。

旧軍の三十年式銃剣。剣身四〇センチ。

「舐めてるのか？ てめえ。ブスツと行くぜ」

国民服の中年男、山岡は、大柄な、しかし骨ばった身体を反らし、何度も首を振った。

「昨日、昨日盗まれたんです。だから今は、金子が」

「こつちの知ったことか。あんたの不始末だ。所場代払えないなら仕方ない、持物全部置いて出て行け」

「そんな、殺生なこと」

山岡は半ば裏返った声で叫んだ。

「このうえ売り物までなくしたら、どうやって生きていけばいいんだ！ 榎崎さん、あんた、このあたしに死ねって言うのか！」

そのとき 榎崎の心臓が一瞬高鳴り、次の一瞬には、彼は言うべき言葉を失っていた。

「死ね」と命じられ、特攻隊となつて、滅び行く祖国に次々と殉じていった仲間たちの顔が、榎崎の脳裏をよぎっていた。

爆弾を抱き、鮮やかな日の丸の鉢巻を締めて、海ゆかば水漬く屍、醜の御盾となつて、神国日本の悠久の大義に、己が身を捧げた戦友たちのまなこが目に見えかぶ。

あの特攻隊の勇士たちは何処へ行ったのか。

いま、特攻隊の勇士は死に、死んだ者は二度と戻らず、生き延びた者は、闇屋として生きている。

では、彼らが守ろうとした日本の国は……？

「それこそ」

気付けば榎崎は、腕を相手の首に絡ませ、喉に銃剣を突き付けていた。

「それこそ、俺たちの知ったことじゃないんだよ」

榎崎は手下に命じ、山岡を市から追い出した。山岡は売り物どころか、自分の着ていた物も全部、身包み剥がされ、犬コロのように追放された。

「ねえ？ 兵隊さん」

榎崎が山岡の荷物を纏めていると、その背後から女が声をかけた。

「その場所の人、もう戻って来ないんだろう？　だったらあたしにおくれよ。あたし、カフェーをやるんだ」

榎崎は、黙って相手の姿を見た。女が昼間に一人で喫茶店をやるということとは、意味はひとつしかない。

歳は中年に達しているだろうが、すらっとした背の高い女で、細い顎と大きな眼を持っている。

「いいだろう。もっともうちは米軍相手専門だが構わないか」

女は、ふっと笑った。

「あたしは、海軍さん仕込みだよ」

榎崎は、すぐにその意味を察し、もう一度女を見た。蓮っ葉な言葉遣いにしても、どこことなく感じる上品さはそのためか。

「士官だな。……どこだ？」

榎崎が訊くと、女は答えた。

「サイパンの海の底。魚の餌になって、少将様さ」

「そうか」

榎崎は海軍の帽章が入った草色の略帽を被り、「ついて来い」と女に言った。二人は真ッ白の日差しの中を、連れ立って歩き出した。

燃える元気な予科練の

意気の翼は勝利の翼

サツと巣立てば荒海越えて

ゆくぞ敵陣殴りこみ……。

傷痍軍人の演奏はまだ続いている。

榎崎は懷から注射器を取り出し、腕にヒロポンを注射した。

（後書き）

この小説は、インターネット小説サイト「駿河南海軍工廠」のブログ「玉川上水」（<http://aquira.blog61.fc2.com/>）上に掲載した同名小説と同一のものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8291c/>

若鷺の歌

2010年10月17日15時28分発行